

青森県小中学校教頭会会報

第118号

あおもり

目次

1. 巻頭言	1
2. 学校訪問（三八教育事務所 小関英規）	2
3. 会員の広場「ナナカマド」	3
4. 全国大会（石川大会）報告	15
5. 県大会（上北大大会）報告	16
6. 知っておきたい職場の法律	21
7. 編集後記	22

巻頭言



学び多き研修の場 みんなで参加しよう

青森市中学校教頭会 会長 山内 明 人

まずもって、先日行われました県小中学校教頭会研究大会上北大大会が平常開催されましたことに感謝申し上げます。開催のため、前年度より準備を進めていただいた上北地方小中学校教頭会の皆様、本当にお疲れさまでした。また、県教育委員会、各教育事務所、各教育委員会、校長会と多くの皆様の御協力もあり大成功であったと思います。大変ありがとうございました。

私も前年度より、この研究大会を楽しみにしていましたが、当日は校長が県外出張のため参加することができず、参加した先生方からお話を伺い、資料を拝見させていただきました。（本当に残念でなりません。）

日々教頭の仕事に忙殺される中で、研修会や情報交換会は、私の中では大変貴重な場であります。県大会は参加できませんでしたが、今年度、私が青森市で受けた研修会について雑感として紹介したいと思います。

先月、青森市中学校教頭研修会が行われました。教頭としての仕事に追われ、いくら時間があっても足りないくらい余裕がない中なのですが、私にとって、年に6回の研修会での、研究活動と情報交換は、同じ教頭仲間からいつも元気をもらえる場となっています。

今年度私たち青森市中学校部会は、第4課題の組織・運営に関する課題に取り組んでおり、今回は、研究主題を「子どもや保護者・地域の人々に信頼される次世代の学校づくりと教頭の関わり」～危機管理に関する専門性の向上～を3つの班に分かれ研究をしています。今年度も、各班の班長は初めて教頭になられた方で、副班長は昨年度の班長とし、各班5、6人の班構成で行っています。班長が各班の研究主題、切り込み方を考え、実態に応じた教頭の具体的な関わりを考えます。今回は、「保護者や地域社会との連携や対応の向上と教頭の役割」「教職員のコンプライアンス向上と教頭の役割」「防災・学校施設等の管理の向上と教頭の役割」となりました。全教頭が各班から示されたアンケート調査に回答し、それぞれの取組や問題点、現状を回答し、班長は、それをまとめ考察を入れ、研究のまとめと今後の課題を考えます。ここで、大規模校から小規模校、保護者や地域との関係など自分の学校とは違う様々な事例を知る機会になります。今まで知り得なかった多くの情報を詳しく聞いたり、やってみての問題点などを確認できたりする場にもなります。多くの情報から

自分の学校でもやれそうなヒントが見えてきます。協議後、各班長がまとめ、発表会に備えます。発表会当日は、市の校長会より校長先生が講師として来られ、各班の発表への御助言と私たち教頭へ叱咤激励の講話があります。短い時間にもかかわらず、今までどの講師の校長先生も、惜しげもなく素晴らしい資料や教育に対する熱い思いを語ってくれます。

また、つい先日は、青森市の臨時の小・中学校教頭研修会が行われました。年度当初に行われた研修会では、教育長が青森市の学校教育課題と課題解決に向けた具体的な10の方策について丁寧に説明してくださいました。今回の研修会も教育長による講話をいただき、前期を振り返り、それぞれの学校で10の方策を意識した教育活動が行われていたか、どれくらい結果を出すことができているかを検証する場となりました。資料には教育課題解決のための10の方策について深く考えさせられる質問や調査結果・数値をグラフ化したもの（グラフや数値はよく見ると今までの自分の見方を変える）があり、ヒント満載の資料をいただきました。後半は、県教育改革有識者会議中間報告について、来年から直ちに実行すべき具体的施策や文部科学省の第4期教育基本計画の現段階のポイントなど情報満載の講話でした。その後に行われた指導主事からの説明も、頭が整理されていく感とする研修会となりました。

日々の業務に負われる教頭職では、研修会に出席する時間も惜しいと考える方もいると思いますが、研修に参加することは、一人で考えるより、多くのアイデアや情報、ヒントを得るよい機会となります。学び続ける教師の先頭に立つ教頭だからこそ、もっと研修を大切にしなければならないのではないのでしょうか。

青森県の教頭先生は、一人一人の生徒・教師が居心地よく安心して学ぶことのできる学校をつくるため御尽力していることと思います。新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行はしましたが、今年はインフルエンザ対策など新しい問題が次々山積しています。そのような中ですが、御健康に留意され、それぞれの学校で御活躍されることを心よりお祈り申し上げます。

終わりに、お忙しい中、今年度の教頭会の諸活動にお力添えいただいた方々並びに県内各小中学校教頭先生の皆様に心より感謝を申し上げます。

全ては子どもたちのため



三八教育事務所

所 長 小 関 英 規

青森県小中学校教頭会会報「あ
おもり」118号の発行を心からお
喜び申し上げますとともに、教頭

先生方におかれましては、本県の学校教育推進のため
に、日頃から御尽力くださっておりますことに、
感謝申し上げます。

さて、三八教育事務所管内には、八戸市と三戸郡
の小学校56校、中学校35校が設置されています。今
年度の所長訪問は、5月から10月まで実施し、全て
の学校を訪問しました。学校経営等の状況に関する
資料の作成や丁寧な御対応にお礼申し上げます。校
長先生の学校経営方針や教頭先生の学校課題解決の
ための取組など、とても興味深く聞かせていただき
ました。直接目にする機会の少ない小・中学校の児
童生徒の様子を参観することもできました。日頃から、
学校運営の要として御尽力くださっている教頭先生
方の働きには、頭が下がる思いでした。

そこで、訪問の中で、特に印象に残ったことをお
伝えします。

一つ目は、「全ての子どもたちの可能性を引き出す、
個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が
図られていることです。主体的・対話的で深い学び
の視点からの授業改善に取り組むとともに、ティ
ームティーチングや少人数指導等を効果的に取り入
れ、個に応じた指導の充実を図っている学校が多く見
られました。また、特別な教育的支援が必要な児童生
徒への対応については、特別支援コーディネーター
を中心とする校内体制を整え、学校全体としての取
組も進められていました。さらに、ICTの整備が進
み、各教科等の特質や児童生徒の実態に応じ、学習
への動機付けや学習内容の理解につながるような工
夫も見られました。教育事務所としても、計画訪問
等において、学習指導要領の趣旨を踏まえ、授業改
善につながるような指導・助言に努めていきます。

二つ目は、不登校児童生徒の増加とそのための学

校の組織的対応です。三八管内でも、不登校児童生徒
の増加は、大きな教育課題の一つです。不登校児童生
徒がいない学校の方が少ない現状にあります。各学校
においては、児童生徒が社会的自立や学校復帰に向か
うことができるよう、家庭や関係機関と連携しながら、
児童生徒を見守りつつ、適切な支援や働きかけを粘り
強く行っていました。さらに、新たな不登校児童生徒
を出さないための学級経営や生徒指導の充実にも努め
ていました。教育事務所としても、不登校対策に関す
る講師を招聘しての研修会の開催や、各地区連絡協議
会等での情報提供を引き続き行っていきます。

三つ目は、働き方改革への取組です。教職員の勤務
時間管理、学校行事等の見直し、ノー残業日の設定、
中学校部活動担当者の複数体制など、各学校の実情に
応じた取組が行われていました。さらに、多くの教頭
先生方が、「職員室の担任」として、教職員と適切に
コミュニケーションを図り、風通しのよい職員室経営
を進めることにより、教職員のメンタルヘルスにも配
慮していました。教育事務所としても、各学校での効
果的な取組事例等の提供に努めていきます。一方、い
くつかの学校で、「教頭先生は頑張りすぎなので、無理
をしすぎないように声をかけている。」という校長
先生のお言葉も耳にしました。教頭先生方には、まず
は御自身の心と体の健康を大事になさって、日々の業
務に取り組まれますようお願いいたします。

その他にも、価値観の多様化に伴う保護者からの
様々な要望や生徒指導上の諸問題への対応など、その
度に教頭先生が学校の中心として、組織的な取組を進
めてくださっており、御苦勞も多いと思います。「全
ては子どもたちのため」という観点にたち、自校の児
童生徒が、さらさらした笑顔で学校生活を過ごすこと
ができるよう、これからも学校運営の要として御尽力
くださいますよう、よろしくお願いいたします。

教頭先生方には、「郷土に誇りを持ち、多様性を尊
重し、創造力豊かで、新しい時代を主体的に切り拓く
人づくりのために、夢や志の実現に向け、知・徳・体
を育む学校教育」の推進のため、これからも、校長先
生の示す学校経営方針の下、教頭先生を中心に教職員
一人一人がそれぞれの持ち味を生かしながら同僚性を
発揮し、協働的に教育活動を推進できるような学校づ
くりのために御活躍くださいますよう、心から期待し
ております。

会員の広場

ナナカマド

人との関わり



青森小支部・金沢小

村上 英夫

「組織は、リーダーの力量以上には伸びない。」

故・野村克也氏の組織論である。熱烈なジャイアンツファンであり、

プロレスファンの私は、特に、ノムさんの言葉に耳を傾けてきたわけではないが、数年間の教育行政時代、上司に何度も言われたこともあり、今、自分が大切にしている言葉になっている。と同時に、この言葉が自分を苦しめている。

私が、これまで出会った教頭は皆、先生方に向き合い相談に乗り、笑顔とコミュニケーション溢れる職員室にし、そして、保護者や地域・関係団体にも丁寧に対応をしていた。つまり、人を大切にしていた。

果たして自分はどうかのだろうかと、この半年を振り返ると、いつもノムさんの言葉にたどり着いてしまうのである。

「子どもたちは、期待をもって登校しているのかな？」

「親は、安心して子どもを登校させているのかな？」

「先生方は、誇りをもって勤務しているのかな？」

自問自答の毎日である。塞ぎ込み、自然と一人の時間を大切にしようともしてしまう。ただ、そんな時、先生方が、笑顔で子どもたち一人一人を大切に接する姿に勇気もらう。保護者の「いつもお世話になっています。」という何気ない一言、地域の「金沢の子たちって、挨拶いいよね。」という一声、子どもたちの「教頭先生、あのね・・・」で始まる会話が私を励ます。校長からも、先輩教頭からもたくさんのアドバイスを頂くことができる。これまでもそうであったように、今も私は、人に支えられ生きていることを実感する毎日である。

金沢小の強みは、保護者・地域が大変協力的なこと、そして、ベテラン・中堅・若手と前向きな教職員が、30人以上いることである。これからも金沢小学区の皆さんが誇れる学校にしていくことができるように、人との関わりを大切に、着実に自分の力量を伸ばしていきたい。自問自答の毎日は変わらないと思うが、

「迷わず行けよ。行けば分かるさ！！」

恩をつないで



青森小支部・浪岡野沢小

田中 文夫

朝6時半、駐車場で車を降りると白鳥の音が聞こえてくる季節となった。耳をすますと、キジの鳴き声やおそらく鳥と思われる他の

生物の鳴き声、また鳥かどうかとも想像もできない生き物の鳴き声とおそらくそれらの生き物から地元の農産物を守るための発砲音らしき音、これまでの生活では聞いたことのない様々な音で身も心もリセットされ1日が始まる。自分にとっては今でも新鮮で心地よい1日の始まりである。

着任当初、「おまかせ校務」を通して送られてくる無数の文書にまず驚いた。一つ一つの処理を終える前に、次の文書が「文書連絡」や「個人連絡」にどんどんたまっていく様子を画面から見て、教頭職の大変さを教えてくださった先輩方の言葉の意味が、実感として痛いほど身に染みた。

りんご畑が広がる小高い丘の上、八甲田山から日が昇り岩木山へと日が沈む、夢のような環境の中に本校はある。元気な全校児童63名と頑張り屋の教職員のみなさんに囲まれ、地域の素材と人財から多くを学ぶ教育活動が展開される本校の日々は、幸せそのものである。

教頭になり半年、未だにどう対処すべきか分からないことが多く、仕事の停滞もしばしばである。しかしそのような時、「元気があれば何でもできる」がモットーの校長や職場の同僚、先輩教頭の助言に大いに助けられている。私の周囲には、心が優しく知識が豊富で仕事ができる人が、本当に多い。支えられて生きていることを、心から感じた半年であった。私が受けたこの恩を、ぜひ周囲の人へとつなぐことができるよう、これからも困難に向き合い乗り越えていこうと思う。

プレイヤーとしての教員人生は一区切り付いた。今後はマネージャーとして、影から先生方のプレーを支えていくつもりである。「恩をつなぐ」を肝に銘じ、まずは自らの周囲の人の幸せのために力を尽くしていきたい。

人のつながりを生かして

青森中支部・浦町中

猪股 歳生



外ヶ浜町出身の私が、新採用として初めて赴任したのはむつ市立田名部中学校。親類もいない初めて踏み入れる土地で支えていただいたのは、先輩の先生方であり、保護者であった。教師として何も知らないことばかりの私は、本当に皆さんに助けてもらった。

次に赴任した佐井村立佐井中学校では、地域の皆さんにも助けられた。地域の活動にも加えていただき、村の一員として私は受け入れてもらった。

自分の母校である外ヶ浜町立蟹田中学校に勤務した際には、私の同級生がたくさん力を貸してくれた。学校行事でも、地域住民の立場で協力してくれた。

平舘中学校での勤務時には、保護者、そして地域が一体となって、学校を支えてくれた。地域を挙げての行事は一体感を感じるものばかりだった。

在勤中に閉校を迎えた青森市立浅虫中学校では、卒業生に助けられた。最後の一年、数々の行事で裏方の仕事を引き受けてくれたのは教え子だった。

そして、浪打中学校や戸山中学校での勤務時代は、学校を越えてたくさんの方々から支えてもらった。指導していた野球部が人数不足で合同チームを編制した際、相手校の多くの父兄から支えてもらい、他校の先生方からもたくさん学ぶことがあった。

私は今まで、本当に多くの方々から支えをいただいていた。そのことが、子どもたちに返って、さらには子どもたちの成長に繋がる有意義な教育活動が展開できた。そう信じている。

私は現在教頭の立場となり、この「人との繋がり」を大事にしていきたいと考えている。休日に、各部活動で頑張っている生徒を応援に行くと、保護者の皆さんと話をする機会を持つことができる。翌朝には、生徒たちと試合の話題で会話が弾む。地域のイベントに顔を出すと、学校では見られない生徒の頑張る姿を目にすることも。地域の皆さんとも様々な話をし、交流を持つことができる。子どもたちにも、そして職員にも、「人を大事にすること」の本質を伝えていくことで、活気ある学校を目指して尽力していきたい。

時を守り 場を清め 礼を正す

青森中支部・西中

三上 洋



「私は西中学校教頭三上と申します。長年にわたり教育界での経験を積み重ね、教育に対する情熱と責任感を持ち続けてまいりました。私の教育理念は、生徒一人一人を尊重し、その個々の個性や能力を最大限に伸ばすことです。また、教育は単に知識を伝えるだけでなく、社会的な価値観や品性の育成にも重きを置くべきだと考えております。これまでに取り組んできたプロジェクトや教育改革において、生徒たちの学習環境や学びの質を向上させることに努めてきました。…中略…教育は連携と協力が不可欠です。校内組織や地域の方々と協力し、情報交換やベストプラクティスの共有を通じて、より良い教育環境の構築に貢献したいと考えております。…中略…どうぞよろしくお願いいたします。」

以上の文は現在、ちまたで話題となっているテキスト生成AIが十数秒で作成したのですが、AIの発達は凄まじいものであることがわかります。Society5.0の到来とともに大きく変化する教育現場で過ごす私たち教職員は明るい未来を夢見ている子供たちにどんな力を身に付けさせればよいのか、2040年前後に迎えると言われているシンギュラリティ（技術的特異点）において、何が求められるのかなどを自問自答しながら自校の教育活動全体を見渡している毎日です。

ICTの発達は学校における教育活動、業務の効率化や簡素化を進めた一方で人と人とのつながりを複雑化し、それによって生じる様々な問題も発生させています。こんな時代に生きている子供たちに自分でわくわくするような夢を実現する努力を続けられるよう学校全体で取り組むためには教頭として何をすべきなのかを手探りで数ヶ月過ごしてきました。その答えは自分なりにはあります。「時を守り 場を清め 礼を正す」です。この言葉はかつて仕えたBOSSが常日頃お話しされていた言葉です。わくわくするような夢を実現するためにはこの言葉を丁寧に実践することが一番の近道であるということを全教職員で取り組んでいけるよう教育活動全体を確認・調整しながら、日々の学校運営に邁進していく決意です。

真・善・美



弘前地区小支部・附属小

葛西 康 隆

先日、補欠授業に入った5年生のクラスで「走れメロス」の読み聞かせをしました。郷土のことについて学習しているようだったの

で、太宰治という青森が誇る文豪を紹介したいという気持ちと、この物語には、どんなに時代が変わったとしても、読む人に訴える不変のメッセージがあると思ったからです。原文のままの音読だったので、「5年生には少し難しいかな」「本をあまり読まない子は途中で飽きてしまうかな」などと思いながらも、読むからには本気でやろうと、特に中盤メロスが葛藤する場面から終盤のクライマックスまで、子供たちの様子を顧みることなく一気に読み通しました。「勇者はひどく赤面した」の末尾とともに本から顔を上げて子供たちの様子を見ると、多くが上気したような表情で満足気であり、中には目を赤くしている子さえいました。授業の後、「いい話だった」「感動した」とわざわざ伝えに来てくれる子もいました。

何が正しいのか…我々大人でさえも時に不安を覚える時代です。大国とよばれる国が隣国に戦争を仕掛けたり、突然病気が蔓延してそれまでの日常や常識が大きく変わってしまったり。我々教員が幾度となく目にしてきた言葉「変化を予測することが困難な時代」を今まさに自分自身が目の当たりにし、これまで自信をもって子供たちに伝えてきた「正しいこと」の根幹が揺らぎそうになることがあります。齢も五十路に差し掛かり、自分の価値観はもう古いのでは、今の子供たちに合わないのでは、という不安も頭をもたげます。

しかし、メロスの物語を聞いた子供たちの様子を見て、私は少し安心しました。美しい行いは、世代を超えて、時代を超えて人の心を打つのだと。本を全く読まないという子が増えていると言われますが、本校の子供たちは読書好きが多いです。物語に夢中になるあまり、廊下を歩きながら読んでいる子も見掛けます。デジタル全盛で清濁玉石あらゆる情報が瞬時に手に入る時代だからこそ、普遍的価値、正しいこと、美しいことを、自信をもって子供たちに伝えるとき、たくさんの人が感動を味わった名著名作を、それとなく子供たちに勧めていきたいと思えます。

150周年



弘前地区小支部・朝陽小

大澤 拓 也

令和5年10月1日、本校は創立150周年を迎えました。

4月から記念事業、記念行事を進める中で、協賛会の皆様、PTA、教職員とたくさんの御支援、御協力を頂きました。

9月30日、記念式典において配付された「創立150周年記念誌」を見返してみると、歴史の中で培われた伝統、それを支えてきた先人の努力と功績を多く感じることができました。

特に校名と校舎の変遷は、私にとって大変興味深く、お気に入りのページとなりました。

- 明治6年10月 一番小学
本町32番地
現在の弘前消防署向かい側
- 明治7年2月 白銀小学
上白銀町1番地
現在の弘前市役所
- 明治11年7月 朝陽小学
本町2番地
現在の弘前税務署
- 明治15年1月 朝陽小学校
- 明治19年8月 中津軽郡朝陽尋常小学校
- 昭和10年10月 在府町5～9番地
現在の弘前大学医学部
- 昭和16年4月 弘前市朝陽国民学校
- 昭和21年4月 青森師範学校男子部・女子部附属国民学校
- 昭和23年4月 弘前市立朝陽小学校
- 昭和24年4月 弘前市立第一朝陽小学校
- 昭和24年9月 弘前市立朝陽小学校
- 昭和27年1月 在府町36番地 現在地

明治、大正、昭和、平成、令和と移りゆく時代の中で、校名が変わったり、校舎の所在地が、火災や借用、譲渡、建替などにより移転したりと、1年1年の点が、150という長い線となって、現在があることを実感できました。

これまで勤務してきた学校にも多くの歴史や伝統がありました。それでも今年「150周年」に触れて、初めてと言っていいくらいの感覚となりました。

出会おう 新しい自分

弘前中支部・東中

佐藤 史子



今年度、弘前市立東中学校へ3度目の赴任をしました。過去通算11年間勤めたことがある学校が、教頭職として初めての勤務校にな

ると知ったときは、少しほっとした気持ちになりました。ところが、いざ着任すると、教諭時代とは違う業務が怒濤のごとく押し寄せ、懐かしさに浸る暇など全くなく、ただただ目の前のことをこなすことで精一杯の日々が続きました。4月、5月は、緊張と焦りで周りが見えておらず失敗も多々ありました。それでも校長先生はじめ教職員の皆さんがいつも笑顔で助けてくださり、本当にありがたかったです。

本稿のタイトル「出会おう 新しい自分」は、東中学校の学校教育目標です。この目標は平成17年に新しく掲げられたもので、その頃私は丁度勤務していました。生徒たちはこの新しい目標に突き動かされ、人との関わりの中で多くの価値観に出会いながら、東中学校の次なる歴史をつくっていきました。以来18年たった今も「出会おう 新しい自分」は、生徒たちにとって自らの生き方を考える、命を帯びた言葉として掲げられています。教室や廊下に掲示されたワークシートの文章には、気づいた「新しい自分」が記されており、子どもたち自身が自らの成長を実感しながら学校生活を送っていることが分かります。当時は斬新で印象的に感じた学校教育目標が、今は伝統となって継承されています。当時を知る者として、これは大変うれしいことです。

今年度、学校づくりを進める上で、校長先生は教育目標の文言の途中に「な」を入れた考え方を示しました。「出会おう あ'な' たらしい自分」です。これは子どもたちだけではなく、職員である私たちにも向けられたメッセージであると受け止めています。

今、学校は次年度に向けた準備が始まりました。未だに慣れない教頭職ではありますが、忙しい中でも“私らしさ”を忘れず、そして子どもたちの“その子らしさ”を大切に、生徒一人一人を教え育んでいきたいと思います。

ある「もの」を大切に、ない「もの」は工夫する

弘前中支部・東目屋中

佐藤 秀仁



自宅を出発し、102号バイパスをひたすら走り、弘前市内を突っ切り、岩木川に出る。そこから川沿いに山間の道を走りながら、よ

うやく本校にたどり着く。4月は残雪を横目にしながら、5月からは新緑に囲まれながらの通勤は、よい気分転換となる（冬の雪道は未だ想像しないようにしているが）。

本校のある旧中津軽郡東目屋村であった東目屋地区は、昭和30年に弘前市と合併し、平成18年の周囲の町村の合併に伴って飛び地が解消され、平成27年から同郡で唯一の自治体である西目屋村より中学校教育の事務受託したことで新たに西目屋村が学区に編入された2つの行政区をもつ独特の学校である。

地域や保護者の関心や期待が高く、学校の取組に協力的であり、特に、本校伝統の「りんご農園活動」においては、保護者やOBの方々が自らのりんご栽培の合間を縫って手伝いに来ていただき、1年を通した農園活動が伝統となっている。

そのような地域とのつながりが深い本校において、教頭としての最初の役割は、学校と地域、PTAとの関係を円滑に繋ぐことであった。学校を支援してくれる様々な関係団体と連絡を取り合いながら、学校運営に参画してもらう。簡単なことではなかったが、長く勤務している教員たちの協力を得ながら、今も関係づくりに努めている。

また、本校には人数は多くはないが、初任者からベテランの先生までの幅広い教職員がいる。それぞれの得意を生かしながら、苦手を補い合う雰囲気醸成されているのも本校の強みであり、これからも大切にしていきたいと感じている。

教頭として思うこと。それは、教職員の声、子どもたちの声、地域の声を聞きながら、これらの今ある財産を大切にしつつ、新たな学びに向け、ない「もの」はみんなのアイデアを生かしながら、工夫を凝らしていくこと。子どもたちが故郷を大切にしつつ、意欲をもって自立していくこと。教職員がそこにやりがいを見出し、ロールモデルとして子どもたちの前に立つこと。そのために縁の下で支えていくことが自分の仕事と捉えている。

希望に満ちた積極性と広く発展性をもった学校へ



八戸小支部・江陽小

石井 一二三

本校は、昭和27年に八戸市立小中野第二小学校として創立開校し、昭和33年に校名を「八戸市立江陽小学校」と変更し、昨年度創立70

周年を迎えました。

また、本校の校章に使われている「江」は、海、湖、沼が陸地に入り込んだ大きな川のような所という意味があり、地上に悠然と広がり大海に通じている所とも考えられております。

江陽地区は、馬淵川、新井田川が太平洋に注ぎ出る両河口にはさまれた地域で、まさに「江」そのものであるとされております。

これに対して「陽」は、太陽のことであり、南に輝くものであり、「天」ということ、すなわち「高く輝く」という意味に考えられております。

「江陽」とは、希望に満ちていて積極性を示しているとともに、広く発展性をもったものであり、それに語感も頗る良いということで決められたとのことです。

また、校章は校名の意味するものを8つの光（当時は学区が8つの町内会からなっていた）で「陽」を表し、それぞれ四方に向かって発展する様を意味し、その中に「江」を図案化したものを表していると言われております。

4月1日、本校へ赴任し、初めて対面した子どもたちの元気のよい挨拶は、7年ぶりの現場復帰で不安な気持ちを吹き飛ばしてくれました。

現在も、元気で明るい子どもたちや前向きでパワフルな教職員に支えられながら、日々、教頭としての生活を送っております。

校名に込められた「希望に満ちた積極性と広く発展性をもって」という願いの実現のため、教職員と協力し、保護者や地域の方々と連携して、江陽小学校の子どもたちの健やかな成長のために、教頭として日々研鑽を重ねていく所存です。

また、今年度より教頭会の皆様にもお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。

教頭としての初心・夢・志



八戸小支部・多賀小

阿保 祐一

4月の赴任時に多賀地区特産の大きくて美味しい市川いちごで歓迎していただき、いちご学習を含む本校の特色ある教育活動の「8S学習」に大きな興味と関心をもった。8Sとは次のような内容の学習である。

- ①心のふるさと学習（Spiritual home study）
- ②清掃活動（School zone clean action）
- ③いちご学習（Strawberry study）
- ④鮭学習（Salmon study）
- ⑤あいさつ運動（Siokaze action）
- ⑥バケツ稲・畑学習（School field action）
- ⑦市川神楽の伝承（Show the local action）
- ⑧水泳学習（Swimming study）

これまでの4年間は感染対策をしながら、伝統ある8S学習を継続してきたが、水泳学習は4年間全く実施していない。本校のプールはいちご農家のノウハウを生かしたビニールハウスで囲われた珍しい全天候型の施設であるものの、プール床のタイルやシャワー、ビニールの巻き上げハンドル、水漏れ対応等、多くの修繕が必要であった。そこで、本校でプール指導をしたことがある先生方の記憶をたどったり、過去の記録写真を見返したり、市教委や業者さんに修繕依頼したり、前管理人の方にプール設備講習会を開いていただいたりしながら、プール学習をスタートさせることができた。（地域の神社で行う市川神楽や相撲大会も多くの多賀小を愛する方々に助けていただいた。）

プール開設や4月からの業務を行ってきて、教頭として大切にしていきたいことは次の事柄である。

- ・学校のことに一番詳しいリーダーになるよう努める
- ・学校に関わる全ての人の声を真摯に聞き大切にする
- ・業者さんと仲良くする、市教委と密に連携する
- ・話し掛けやすく親しみやすい教頭だと思ってもらう
- ・校長を助け、報告・連絡・相談を常に細やかに行う
- ・子どもも先生も大好きな学校を全力でつくる

児童数105名、創立148周年の本校の学校教育目標は、「夢や志をもち、共に高め合う児童の育成」である。いろいろと失敗したり困ったりすることがあると思うが、教頭としての初心・夢・志を忘れることなく教頭職を元気に明るく全うしていきたいと思う。

学校と地域のつながりの大切さに学ぶ



八戸中支部・南浜中

田 中 秀 子

本校は、白い砂浜、そして青々とした松林と芝生が彩る海岸線で知られる名勝国立公園「種差海岸」の一画にあります。海沿いを走る

八戸線の電車で通う生徒もあり、朝7時に大久喜駅から一列になって自分の足で登下校する子どもたちに、落ち着きとたくましさを感じます。また、2019年6月に全線開通した青森県八戸市から福島県相馬市までの太平洋沿岸をつなぐ、総距離1,000kmにも及ぶ「みちのく潮風トレイル」がありますが、その一部に本校が位置付けられています。

全校生徒22名と小規模校ではありますが、生徒一人一人に寄り添える利点を生かしながら、さまざまな教育活動が行われています。特に、41年間続く「地域貢献活動」では、「はちのへクリーンパートナー」に登録し、近くの大久喜漁港をはじめ、種差海岸や金浜駅などの清掃活動を行っています。また、三陸復興国立公園指定10周年を記念して4年ぶりに開催された「種差海岸観光まつり」では、ボランティア活動を行う中で、本校の創立70周年記念の年であることをPRすることができました。この地域貢献活動やボランティア活動を通じて、子どもたちは、ふるさと「南浜」に愛着と誇りをもっていることが、表情から容易に見て取ることができます。また、地域の方々にも、本校に教頭として赴任してからことあるごとに「教頭先生、頑張ってください。何かあったら声をかけてください。」と案じてくださる声とともに、様々な場面で御支援と御理解をいただいています。

これまで教諭であった景色と教頭として見える景色が違いすぎて、業務に追われ圧倒される毎日です。校長の経営方針の柱に、「志」があります。私自身も校長の目指す学校づくりに少しでも貢献できるよう、支えられる側から少しでも支える側になれるよう、教頭としての「志」をもって職務に当たりたいと思います。

創立70周年を迎える記念すべき年に南浜地区の教育に関われることは、私にとって貴重な経験となります。誠実さと謙虚さを忘れずに取り組んでまいります。

新鮮な日々



八戸中支部・白銀南中

河 村 由美子

本校は、八戸市の東部に位置し、北に太平洋、西に八甲田連峰、南に階上岳を眺望できる、小高い丘にあります。近隣の「ホテルの里」

には、夏になるとたくさんのホテルが舞うなど、自然豊かな場所でもあります。平成3年に団地化が進み生徒数が増加したことから、白銀中学校と分離、独立した中学校ですが、現在では少子化の波には逆らえず、全校生徒236名と、開校時の483名から半数となっています。また、本校は合唱にとっても力を入れており、朝と帰りの学活では、それぞれの学級から素敵な歌声が響き渡ります。今年度は、合唱部がNHK合唱コンクールと全日本合唱コンクールで、東北大会出場を果たし、さらに学校の合唱を盛り上げています。

さて、教頭として白銀南中に赴任して数か月がたちましたが、昨年度まで学級担任として生徒とともに走り回っていた時と比べ、今まで気にしなかったこと、知らなかったことなど、新しいことに直面する毎日でした。教職員とのコミュニケーション、施設・設備に関すること、PTAや地域との連携など、学校が一つの目標に向かって動くために、こんなにもたくさんの人や物に支えられているのかを実感する日々です。また、新型コロナウイルスへの対応が緩和され、いろいろなことが元通りに近くなってきたことで、学校行事はもとより、地域の活動やお祭りも4年ぶりに行われるものも多く、どこまで元通りにできるのか、元通りにすればよいのか、教職員やPTAとともに考え、生徒の成長につながるより良い方法を見つける日々でもあります。様々な課題もありますが、私のモットーである、「笑顔で乗り切る」を常に念頭に置き、明るい生徒、明るい学校、明るい地域を目指し、元気に職務を遂行していきたいと思います。

この仕事を通じて



東郡支部・山口小

阿部 洋 治

着任前夜は、「職員皆さんの力となれるように、がんばらないといけないな。」とか「温かい心で接する職員室経営をしなければい

けないな。」という思いでおりました。

しかし、いざ始まってみると上記のような思いがすっ飛ばす如く、処理する書類が雪崩落ち、欲しいデータの在りかに迷う毎日。思うようにはかどらない仕事に、気持ちばかりがはやりまします。コロナ規制も緩和されつつあることで、昨年度の資料と共に、3～4年前のものも探る必要が出てくるため、自分の中で整理するのに時間も掛かります。更には、分掌をまたぐような、複雑な仕事が入ってくるものですから、「覚悟はしていたものの、なんと多岐にわたる職務だ。」と思ってしまいました。（正直、今もですが。）

辞令交付式の際には、講話で「教頭は、事務屋であってはいけない。」という旨のお話があったのですが、数ヶ月して見て、「事務的仕事にも精通していないと、なかなか務まらないな。」というのが本音です。

と、うろたえ始めた頃、周りにいらっしゃる教頭先生方を見ると、実に生き生きと仕事をしていらっしゃる。聞けば、「校長先生の描くグランドデザインを職員に示し～」とか、「起案文書に赤を入れつつ、参考となるものを示しながら～」などと輝いた目でお話なさいます。

これを聞いて、「どうせ私など・・・」とひがみ、私の心の揺れは更に増すのですが、半年経って、これではいけないな、と思うようになりました。

開き直ったというか、観念したようなものですが、周りの皆さんの行動から学び、微力ながら前進して行かなければと思うようになったのは、私の成長に思います。

この職務に、私は日々、鍛えられております。

愛する平内町の東からこんにちは



東郡支部・東小

安 保 泰 仁

本校は、東青管内の最東端に位置する、全校児童47名の小規模校である。明治10年の清水川小学校創設から150年弱、平内町東地区

の多くの小学校が改称や統合を繰り返して現在に至る。

平内町での勤務は今回で2回目となる。一度目は平成13年からの4年間で、教員として2校目、異様に平均年齢が低く、情熱にあふれた仲間たちと二度目の青春時代を小湊小学校で過ごした。そして現在、当時の2倍の年齢となったが、懐かしい平内町での勤務ということで、気持ちは今でもアオハル真っ只中である。立派に成長した当時の教え子と時々再会できるのも、楽しみの一つである。

さて、教頭として本校で数か月を過ごし、学級担任時代とは大きく異なる仕事をする中ではあるが、「仕事に追われない」ようにすることを心掛けている。決して仕事を「追いかけている」わけではないが、黙っていても怒濤のようにやってくる仕事を、得意技「分からないふりをして（実際、ほとんど分からない）人に聞く」を駆使してなんとか期限内に対応している。

先生方には春の最初の挨拶で、「気持ちよく仕事をしてもらえるように尽力する」という決意を伝えた。これまでの職場では、笑いが絶えない学校を目指し、学級やサッカー部の子どもたち、また、近隣数メートル内の同僚を笑わせることに、迷惑と思われながらもエネルギーの多くを注いできた。教頭としては明るい職員室経営はもちろんのこと、学校課題の解決と教育目標の実現に向け、組織が機能するように、学校や地域の教育資源をフル活用することができるよう、目を配り、気を配ることが求められる。そして、本校の子どもたちが、決して多くはない同窓生とともに、夢や思いをもって堂々と中学校に進学し、活躍できる資質や能力を存分に育成する学校を目指す。

本稿を執筆している途中で、学校行事で不在の担任に代わってある学級の補教に入った。国語の授業をやらせてもらった。子どもたちの良い反応に、「これだよ、これ！」教頭先生方ならきっと経験がおりだろう。ああ楽しかった、ほとんど雑談で終わったが。

こどもり学園の教育活動のために

西北支部・小泊中

岩 淵 智 哉



令和5年4月、中泊町立小泊中学校教頭として赴任しました。全校生徒40名。この規模は自身にとって18年前に勤務した岩崎中学校

以来、久しぶりとなりました。

小泊中学校は、昨年度より小中一貫校こどもり学園としてスタートしており、これまで小学生と一緒に活動することがなかった私には何もかもが新鮮でした。それぞれカリキュラムが違うため、授業の開始終了はノーチャイム。給食や掃除の時間も別々。技能教科の特別教室は小学校と合わせて使うスペースになっており、時間割の編成のあり方が教務主任の腕の見せどころ。そして、職員室は小中一緒になっており、それぞれの話題を共有することができます。小学校の三橋教頭先生からはいろいろな場面で声を掛けていただき、たくさんのことを教わりながらなんとか進めている今日の頃でした。

4月赴任した当初はとにかく不安と緊張感ばかりで、何も頭が働いていなかったように感じます。目の前にあることをとにかく進めることで精一杯でした。「教頭先生」と呼ばれることに対しての違和感、会議等では何をどのように発言すればよいのだろうか、という戸惑い。1つのことに対応しているうちに、別の話題が出てきてさらに手間取ってしまう始末。そんな中で、多くの方々にたくさん支えられてきました。また、各校の教頭先生へ相談・連絡した時には、大変温かく声を掛けていただきました。つながりの深さがすごく大切なんだと実感しました。そして、これからも大切にしていきたいと思いました。

この半年で少しずつ見えてきた教頭職。校長の経営方針を共有しあい、子どもたちが充実した学校生活を送るためにやらなければならないことは多々感じられます。同僚教員とともに連携・協働、そして学び合い、チームとして機能できる職場の雰囲気づくりに全力で取り組んでいきたいです。そして、こどもり学園が小中一貫校としてよりよい教育活動を進められるよう、さらに貢献していきたいと思います。

感謝の思いを胸に

西北支部・薄市小

石 戸 崇 之



♪この坂道のぼったら〜僕の学校が〜♪で始まる「学校坂道」という歌があります。私が赴任した薄市小学校は、まさに坂の上の学

校でした。全校児童は41名。複式学級が2つあり、自然に囲まれた素敵な学校です。

採用面談の席で、新任地が中泊町であることを知りある程度覚悟はしていたものの、他管交流という名のもと、まったく知らない土地での勤務になるということや、教諭ならともかく教頭としての新生活など見当が付くはずもなく、ただただ不安な気持ちであったことを覚えています。

教頭として着任後、もっとも鮮明に覚えていることは、職員室の景色です。これまであまり意識したことはなかったのですが、全体を見渡せる席になり、良くも悪くも注目されます。校長先生から言われた「職員室の担任である」という言葉が心に響きました。また、覚悟はしていましたが、もはや石戸先生とは呼ばれなくなりました。常に「教頭先生」です。一抹の寂しとともに、立場が変わったことを実感させられました。今思い返すと、まだまだ自覚が足りていないだけだったのですが…。

また、周囲の人の支えにも気付けたことも大きな変化です。これまでの教員生活でも感謝の思いは大切にしてきたつもりでしたが、今回の異動で痛感しました。成長を見守り、支えてくれる校長先生をはじめ、やさしく頼りになる職場の同僚、事情を察し、予め様々手配してくれた前任の教頭先生、PTAの皆さんや地域の皆さん、そして何より素直で明るい薄市の子どものおかげで今があります。

本校では、「小規模校のメリットを生かす教育・デメリットを解消する教育」が保護者との約束になっています。言うほど簡単ではありませんが「チームウスイチ」の一員として、なんとか果たしたいと思っています。これまでの様々な出会いに感謝しながら、ちょっとずつ恩返しができるよう、今後も精進していきたいです。

笑顔かがやく太陽の子

南地方支部・黒石東小

藤田 裕 士



黒石東小学校は、2020(令和2)年4月1日、黒石東小学校、追子野木小学校、浅瀬石小学校、牡丹平小学校の4校を統合して開校し

ました。令和5年度は、統合4年目となり、児童数553人、職員数53人（会計年度任用職員、給食員等を含む）でスタートしました。

3年ぶりの教育現場復帰と初めての大規模校勤務のため、思うように仕事を進められず、大変迷惑を掛けましたが、協力的で温かい職員に助けてもらいながら何とか今日まで進めることができました。

本校は「太陽の学校」と呼ばれています。児童玄関から校舎に入ると「太陽の子」と書かれた書が目を引きまします。第14代黒石市長の鳴海広道氏によるものです。また、体育館に入ると、「太陽の学校 希望は高くおおらかに」と書かれた看板が目を引きまします。「希望は高くおおらかに」は校歌の歌詞の一節です。「太陽」という言葉には、「太陽のように明るく元気に自分の得意なことや好きなことに向かって努力し、夢を育てる」という願いが込められています。日頃から指導する側もされる側も「太陽」を意識し、「太陽の子」の実現に向けて努力しているので、本校は明るく元気で活気に満ち溢れています。昨年度まで3つあった教育目標を今年度は「笑顔かがやく太陽の子」と一本化し、その実現に向け、「思いやりのある子」「自分の力で学ぶ子」「心身ともに健康な子」の3つの努力目標を設定し、徳・知・体の調和のとれた「太陽の子」を育てて参ります。

6台のスクールバスが登下校で利用されるほど広い学区ですが、児童数が多い分、保護者の学校に対する期待も大きいです。地域の方々の協力も大変素晴らしく、読み聞かせ（すくすくの会）、交通防犯部（見守り隊）、公民館職員と情報交換をする「東小カフェ」等、学校との「関わり」を大事にしてくれています。私は、これまでの3年間で築上げてきた地域との絆を大切にしながら、教育目標である「笑顔かがやく太陽の子」に児童一人一人が育つよう、職員と協力しながら職務に取り組んでいきます。

夢に向かって仲間とともに TRY MY BEST

南地方支部・平賀東小

仲 山 啓



「未来の日本を支える子どもたちを育てる教員という職業。何て夢のある素晴らしい仕事だろう。」理想を胸に飛び込んだ小学校教員

の道。

右も左も分からない若造を、先輩方が力強く支えてくださり、何とか務め上げた初めての学級担任。教える子の悩みや不安にうまく対応できなかった時も、大失敗してご迷惑をお掛けした時も、どっしりと構え、親身になって助言して下さった管理職の先生方。「みんなで頑張ろう」と前向きに取り組んで下さった同僚の先生方。「子どもたちを育てる」と意気込んでいた私自身が、実は子どもたちや同僚の先生方に励まされ支えられ、成長してきたということに今強く気付かされています。故郷秋田から見ず知らずの青森へと一人でやってきた私の周りには、気が付けばいつも素晴らしい「仲間」がいました。

そして今、私は22年間住み慣れた戸を離れ、縁あって平川市立平賀東小学校に教頭として赴任しました。見ず知らずの土地での単身赴任。アパートで寝る初日の夜の布団から見る天井は、どこまでも深い漆黒の闇。先行きの見えない不安に押し潰されそうで、なかなか眠りに就くことができませんでした。

新しい勤務地、そして他管での教頭業務のスタート。「調べ、聞き、探し、聞き、間違い、直し、次へ…」まるで転職したかのような仕事の波に飲み込まれながらも、やはり救いの神は、校長先生をはじめとする同僚の先生方。新米教頭の質問には仕事の手を止めて一つ一つ答え、足りない点は助言をくださり、申し訳なさ感謝の気持ちで一杯でした。

「教員離れ」というゴシックを目にすることが多くなってきている昨今ですが、教頭になった今も、「未来を支える子どもたちを育てる」という教員の最大の魅力を感じない日はありません。不思議な何かのご縁で出逢った平賀東小の「仲間」とともに、今日も、『夢に向かって TRY MY BEST』していきます。魅力溢れる学校や先生方、そして素直でめんこい子どもたち。目の前の未来は明るく、どこまでも澄み渡っています。

みんなの学校「おおぞら小学校」

上北支部・おおぞら小

竹本 陽子



他管から赴任することになった「おおぞら小学校」。その学校名を聞いて、初めに頭に浮かんだのは、「みんなの学校」として映画化も

された大阪市立大空小学校でした。奇しくも、上北地区の小学校で木村泰子元大空小学校長の講演を聞いていたことを思い出し、なんとという縁なのだろうと感慨深いものがありました。

実際に赴任した「おおぞら小学校」は、淡いクリーム色の外壁の何ともかわいらしい学校でした。そして、そこには98名の地域の宝と多様性を認め合い、チーム力あふれる教職員がいました。そして、新任教頭の私に多くの学びを与え、道筋を示してくださる校長先生がいました。また、学校を温かく見守り、協働体制で取り組んでくださる保護者と地域の方々がありました。教頭としての職務そのものもちろんですが、この地で出会うすべての「ひと・もの・こと」が初めての私にとって、何とも力強く、ここでも頑張れるという思いをもつことができました。多様なつながりの中、本当にたくさんの人に支えられていることへの感謝の気持ちでいっぱいの毎日を送っています。

映画「みんなの学校」では、子どもを主語に考え、すべての子どもに居場所があり、すべての子どもの学習権を保証する学校づくりに取り組んでいる様子が描かれていました。それは、本校校長の経営方針「子どもが主役の学校」そのものだと感じています。その具現化をめざして、日々の教育活動に組織的に取り組んでいるところです。

働き方改革を進める中で、その土台となる安全・安心な勤務環境を整え、先生方の身体的、精神的、社会的に良好な状態を保っていくことができればと考えています。慶應義塾大学の前野隆司教授が提唱する幸せの4つの因子、「やってみよう！因子」「ありがとう！因子」「なんとかなる！因子」「ありのままに！因子」を、私も含めて先生方が満たすことができるよう、日々職務に邁進したいと思います。みんなの学校「おおぞら小学校」のために！

大きな木ノ下に

上北支部・木ノ下中

谷村 史夫



本校は三沢市及び八戸市近郊のベッドタウンとして急速に宅地開発が進んでいる地域に位置します。

校舎は開発の進む住宅地から少し外れた場所にあり、早朝や生徒が帰った夜には、野ウサギやキツツキ、キジやテンといった珍しい動物が校地内を歩き回っています。

住宅地の広がりとともに、ここ数年、在籍生徒数は少しずつ増えています。全国的に少子化が進む中で、生徒数が増加している学校は県内でも少なく、校内は活気にあふれ、今まさに伸び盛りにあると言えます。校舎もリニューアルしていきます。今年度はエアコン設置工事と令和7年度完成予定の新体育館建設工事、そして来年度はさらに学級数が増えるため、冬には教室の増設工事が行われます。

生徒の元気な声と工事の活気。学校全体に新しく生まれ変わることへの期待感があふれていて、私も日々変わっていく風景にわくわくしながら毎日を過ごしています。高度成長真っ只中にある学校に、教頭として立ち会えることは貴重な経験だと思っています。

初めて経験する教頭としての仕事は、質・量ともに濃密で、1日があっという間に過ぎていきます。体感時間はこれまでの2倍速。机に座っていて、ふと顔を上げて時計を見ると、あっという間に1時間が過ぎていくことも珍しくありません。もちろん疲れも感じますが、同時に「やることがたくさんある」ことの充実感も感じます。うまくできないこと、分からないこともたくさんありますが、「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」と自分に言い聞かせ、何かあったらすぐに質問し、その日のうちに解決しようと心掛けています。

ここまで校長先生始め先生方、事務の方、教育委員会の方々、業者の方々、保護者の方々、そして生徒に色々なことを教えてもらいながら、少しずつ経験値を増やしていこうと日々、戦っています。

あこがれは、これまでお世話になってきた校長先生や教頭先生のような「すべてを包み込むようなおおらかさ」をもった存在。今はまだ細くて頼りない若木ですが、経験という年輪を重ねていつか大木になり、その木ノ下に集う生徒や先生方が安心して過ごしてもらえる、そんな存在になっていきたいと思っています。

4年ぶりに再開した牛滝小への赴任

下北支部・牛滝小

扇 谷 欣 展



今年4月、休校から4年ぶりの再開となった牛滝小に赴任して、ちょうど半年が過ぎようとしています。

本校は、児童2名、教職員4名の極小規模の学校ですが、これまでにあまり前例のない、休校からの学校再開ということでマスコミの注目度も高く、年度当初はテレビ・新聞各社からの取材要請の多さに困惑しました。

取材もさることながら、これまでの半年間を振り返ると、新任教頭として実に様々な経験ができました。

教頭職とはいえ、事務職員や技能主事が配置されていない本校では、給与事務や旅費請求等の事務処理、様々な作業を教頭が担当しなければなりません。年度当初は、学校再開に向けた諸計画の作成や打合せ、環境整備、学校会計用通帳の新規作成・・・等、処理すべき仕事如山積みの中、同時に不慣れな事務仕事や作業をこなすことに正直骨が折れました。事務職員や技能主事の存在の有り難さを身に染みて実感した次第です。

しかし、上記は極小規模校だからこそ経験できることでもあります。仕事に取り掛かってみて、今では、これまで意識してこなかった様々な学校事務や作業の様子が少しずつ分かるようになり、視野も少し広がったような感じがします。

幸いにも、学校事務に関しては事務共同実施という制度があり大変助かっています。同村内小・中学校の事務職員のお二人に、大変お世話になっています。大きなミス無く事務処理ができているのは、紛れもなくお二人のお陰であり、本当に感謝しています。

また、教育活動を支える環境整備等の作業は、保護者や地区総代さんをはじめとした地域の方々のご協力、村教育委員会職員の皆様のご支援の上に成り立っています。特に一学期は、本校職員だけでは賄いきれない状況でしたので、大変助かりました。温かいサポートに心から感謝しています。

最後に、教頭としてまだまだ至らない点がありますが、子供たちの健やかな成長のために精進を重ね、今後も精一杯頑張っていきたいと思います。

感謝の気持ちを忘れずに

下北支部・近川中

猪 口 優 野



本校は、下北半島のまさかりの根元にある全校生徒16名の小規模校である。本校での勤務は2回目であり、12年経って戻ってきても、

本校がずっと大切にしてきた「さわやかな挨拶」「美しい合唱」「きれいな校舎」は全く変わっていなかった。素直で優しい子供たちと一緒に、授業や合唱、清掃活動に取り組みながら、こんなに素敵な学校に再度勤務することができ、本当に感謝している。

さて、以前本校に勤務させていただいた期間は、「生命」について考えさせられた5年間だった。1つ目は生徒の死、2つ目は東日本大震災、3つ目は吹雪による国道279号線の車の立ち往生に見舞われたからだ。勤務1年目の冬に2年生だったN君が病気で亡くなった。車椅子で一生懸命に登校していた姿が今でも忘れられない。そして、合唱練習時に激しい揺れに見舞われた3月11日。停電で情報が入ってこない中、技術の時間に作ったラジオの音だけを、教室で子供たちと静かに聞いていた。その地震から1年経たずして見舞われた2月1日の豪雪。帰宅時に吹雪で帰れなくなり、一晩を車の中で過ごした。このように生命の尊さ、自然の驚異を痛感させられた5年間であった。

当時を思い返すとともに、今度は自身が子供たち、そして一生懸命に働いてくださる教職員をお預かりしているのだと思うと、その責任の重さに怖くて仕方がない時もある。その場その場の状況で適切に判断できるか、一方向からではなく、様々な角度から見て考えるそんなトレーニングをもっとしていかなければと感じている。

それでもやはり学校は良い。子供たちや先生方、そして何より自分自身の成長を日々実感することができるからだ。

自分に何ができるか分からないが、現状に満足せず、子供たちにとっては「楽しく学び、鍛えることができる環境」を、先生方にとっては「楽しく働きやすい環境」を提供できるよう心掛けていきたいと思っている。

また、支えてくださる校長先生や教職員、保護者の皆様に感謝して、日々努めていきたい。

「教頭先生って・・・」



三戸支部・階上中

川井利之

教頭職を仰せつかり現任校に赴任して半年。今率直に感じていることは「教頭先生って凄い（凄かった）んだなあ」ということです。

異動の際に上司から掛けられた言葉「人事評価からトイレの修理まで」のとおり、多種多様な業務に追われながら日々が過ぎていきます。私がお会いしてきた教頭先生方は、こんなに多忙なのに、それをみじんにも感じさせない私とはまるで大違いの方々ばかりです。どうやったらあんな穏やかな顔で職員室に座って着々と事務仕事をこなしながら、授業を行い、教職員や家庭・地域の困り感に対しても敏感にセンサーを働かせ、真摯に耳を傾けて、冷静沈着に的確な指示を出し、教職員をまとめあげてこられたのだろうと、尊敬の念を抱かざるを得ません。併せて、狭い視野でしか物事を捉えず、時に悪態をついてきた自身の無礼がこの上なく恥ずかしく、今更ながら教頭先生方にお詫び申し上げたい思いでいっぱいです。

本校の生徒は素直で、毎日を懸命に生きている生徒ばかりです。本校の教職員はそんな生徒に真摯に向き合い、寄り添ってくれる方ばかりです。私なんかよりよっぽど指導力もハートもある方ばかりなので、日々学ばせてもらうことが多く、感謝しっぱなしです。

頭の中を常時駆け巡るのはこれまでの教員生活で救われてきた言葉の数々です。「信は力なり」「信じるとは任せること」「教育は一年勝負」「日々は勝負」「生徒は教師が育ててほしいと思うとおりに育つ」「自分壊し」「叱ったら必ず褒める、褒めるために叱る」「一日生きることは一歩前に進むことでありたい」「比べるべきは周りではなく過去の自分のみ」「人生は負け勝ち」「8・2, 5・5, 2・8」「至誠而不動者未之有也」・・・。

私は不器用でスマートに仕事できません。みんなの困り感やニーズに対しても正解を提供できる力も乏しいと思っています。ですが、自分らしく泥臭くガムシャラに、学んできたことを総動員して納得解を導き出し、みんなのために働いていこうと思っています。

雲外蒼天



三戸支部・田子中

小峠和広

『雲外蒼天』～ 雲の上はいつも青空 ～

令和4年、辛い苦しい思いをしたとき、仕事に行き詰まったとき、

自分に言い聞かせていた言葉です。

3月末、赴任する田子中学校まで、一体どれくらい通勤時間がかかるのか、距離はどれくらいなのか、車を走らせてみました。時間にしておよそ1時間15分、距離にして46km超。お世話になった教頭先生方はどなたも、朝6時30分には学校を開け、生徒・先生方を迎えていました。それを考えると、これから朝は何時に家を出ればいいのか、冬でもこの距離を通勤し続けることができるのか、そもそも自分に教頭職が務まるのか・・・不安ばかりが募っていました。しかし、到着して大きな校舎を見上げると、『生徒会テーマ 雲外蒼天』と大きな文字で掲げてありました。言葉に導かれたのか、この言葉を自分が求めたのか、いずれにしても新天地となる田子中での覚悟を決めた瞬間でした。

いざ仕事を進めてみると、半年以上が過ぎた今でも失敗だらけ。教務や学年主任とは異なる教頭としての動きをどうすればいいのか、戸惑う日々の連続。そしてもどかしさ。教頭職は端で見ていたよりもずっと大変な仕事だと痛感しています。授業で生徒と関わっている時や、職員室で先生方が談笑している姿を見て、その輪（和）の中でホッとしている自分の姿に気がきます。

今では、1時間以上かかる通勤時間も、自分1人の貴重な時間、関東首都圏で働いている人たちの通勤時間と同じ都会的な動きと考えれば雲外蒼天。校長先生から指導・助言を受けたときも、新しい視点を得ることができたと考えれば雲外蒼天。

すべては「子供たちの笑顔のために」「地域のために」に加えて「職員室が笑顔であふれるように」、これからは雲外蒼天です。

令和5年度

第65回全国公立学校教頭会研究大会 石川大会の報告

上北支部・六戸中 佐久間 宗 徳

弘前中支部・相馬中 三 上 俊 英

【1日目 シンポジウム】

テーマ「ふるさとに誇りをもち 未来を切り拓く心豊かな人づくりを目指す これからの学校運営の推進」

國學院大學教授 田村 学氏をコーディネーターに、学校法人湘南学園学園長住田昌治氏、加賀谷グループ女将長谷川明子氏、加賀市教育委員会教育長島谷千春氏をシンポジストとして、シンポジウムが行われた。

シンポジウムで参考になったことを次に紹介する。

【田村氏】

- ・今までの教育は教師中心であったが、これからは生徒中心でどのように学ぶかが大事である。
- ・カリキュラムマネジメントの3つの側面を意識することが必要である。

【長谷川氏】

- ・笑顔で相手のよいところを褒める。注意するときにも褒めてから言う。
- ・社員が気持ちよく働けるようにするには自分はどうできるかを常に考えている。

【住田氏】

- ・学校らしい学校を壊すことから始める。
- ・人は育てるのではなく育つものである。
- ・教える側も学び続ける姿勢を子どもたちに見せる。
- ・教職員のhappyが子どもの笑顔になる。

【島谷氏】

- ・学びを変える。
- ・時間を自分で支配する。
- ・自分の人生を豊かにするために失敗を恐れない、失敗したことで強くなれる。
- ・自分に強みをもつ自分でやりたいことは頑張れる。
- ・心理的安全性が大切、対話重視、職員室で雑談をもっとしよう。

シンポジウムで紹介された加賀市の学校教育ビジョン「BE THE PLAYER」は、最先端の内容となっており参考になることがたくさんあった。また、「レジリエンス」「心理的安全性」について言及されていた。やはり「令和の日本型学校教育」について熟読する必要があると感じた。その他の答申・通知についても調べていきたい。

【1日目 記念講演】

演題「豊かな感性を育む場所をつくる」

この記念講演者である長谷川祐子氏は、2021年金沢21世紀美術館館長に就任し、教育、創造、エンターテインメント、コミュニケーションの場など、新たな「まちの広場」としての役割を担うため、様々な組織と連携を図り、新しい美術館活動を展開してきた。金沢市民はもちろん、国内や海外からの来訪者を含め、多様な人々に開かれた美術館であること。ここに集う多様な人々を受け入れ、一人一人の個性や背景となる文化が尊重されながら一つのハーモニーとなっていく。ポリフォニー（多声唱和）の音が聞こえる美術館。と同館ホームページには記されている。

多様性は、多様なものがそこにあるだけでは実現できないと考え、ポリフォニーとは、それぞれが違う声やトーンで歌っても、全体として一つのハーモニーになっていくということ。異なるもの同士が、お互いを排除せずに受け入れることで、新しい意味や創造性が生まれてくること。そして、多様性をもつポジティブな価値を、ポリフォニーという言葉に込めた。これらの話題は、多様性を認め合う学校づくりのヒントになるだろう。

また金沢は、藩政期から伝わる伝統工芸をはじめとする地域の固有文化が、多様化する21世紀にどのような可能性をもつのか模索している都市であり、さらに未来の文化を創り出す子どもたちに開かれた美術館として、見て、触れて、体験できる最適の環境を提供し、子どもたちの成長とともに美術館も時代を超えて成長していきたいと話された内容から、「令和の日本型学校教育」と「不易流行」という言葉を思い浮かべた。いつまでも変わらないことを大切にしつつ、常に新しい変化を取り入れ、さらに新しさを求めて変化することは今の教育に求められていることではないか。

最後に「私は自分が面白いと思うことをやります。他の方がすでにやっていることは、もうあるので大丈夫。私が面白いと思うこと、それをきっとみんなも面白がってくれるのでは、と思っているだけなのです。」と締めくくった。

令和5年度 創立60周年記念

第50回青森県小中学校教頭会研究大会 上北大会に参加して

青森小支部・浪岡南小 八木橋 直 哉

11月2日（木）、三沢市国際交流センター（開会行事・記念講演）、三沢市総合社会福祉センター・グランヒルつたや（分科会）を会場に、標記研究大会が行われた。

令和元年の青森大会以来、4年ぶりに集合形式での開催としたほか、記念講演をオンデマンド配信とし、多くの教頭先生方が視聴できるようにした。

【開会行事】



◇会長挨拶

県小中学校教頭会 会長 高坂 隆幸

本年度は、第13期統一主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」を掲げた一年次である。記念講演や顔を突き合わせての分科会により、今後の研究を深化していくための基盤となる大会になることを確信している。

◇来賓祝辞

青森県教育委員会教育長 風張 知子

皆様方が大会を通じて自ら研さんを積み、資質・能力の向上に取り組まれることは大変意義深いことであり、得られた知見が今後の職務に生かされることを期待している。



三沢市長 小檜山 吉紀

（代読 山内 教育長）

学校運営の要である教頭先生方においては、子どもと教員の堅固な信頼関係が、すべての教育活動の土台であることを、若い世代に伝えていただきたい。

県中学校長会会長 木村 信一

「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という教育の目標を深く胸に刻み、我が国を支える子どもたちの夢や志の実現に向け、知・徳・体を育む学校教育の推進に向け努力されることを期待している。



【全体会】

開会行事の後、全体会が行われた。



蛭名実行委員長の挨拶

◇基調提案

県小中学校教頭会 研究委員長 松浦 巨樹

学校現場では、ワークライフバランスを重視した持続可能な学校づくり、家庭や地域に信頼され魅力を感じてもらえる学校づくりに取り組むことは喫緊の課題である。さらに、ICTを効果的に活用し、学力向上を図ることも学校の果たす役割の一つである。そして、これら山積している課題を目前に、職務遂行に当たっての自覚をもち、自らの資質能力の向上を図りながら学校運営を担っていくことが教頭の職務だと言える。

分科会において、誌面発表開催であった前回大会の分も含め4年ぶりに顔を合わせながら活発な研究協議を行い、実り多い研究大会になることを期待している。



松浦研究委員長の基調提案

【記念講演】

演 題

『こども食堂バスが美味しく楽しい「食」をお届けします』

～十和田こども食堂実行委員会の新たな挑戦！～

講演者 十和田こども食堂実行委員会

代表 水尻 和幸氏

2019年、地域の貧困と孤食を少しでも減らしたいという目的を掲げて、知人の弁護士と互いの仲間を集めて「十和田こども食堂実行委員会」を設立。不定期ながら、十和田市の公共施設を借りてこども食堂を開催する。活動を重ねるうち、いろいろな地域に出向いてこども食堂を開催し、たくさんの人に利用してほしいと考え、クラウドファンディングを活用してバスを購入し、自らの手で車内を改造。バスの中で調理したものを食べてもらう新しいスタイルを考案し、日本初となる「こども食堂バス」をデビューさせる。

コロナ禍においても、テイクアウト式のこども食堂を開催していたが、他市町村からもオファーが来るようになり、県全体のこども食堂の普及率向上という大きな目標を掲げ、「こども食堂バス青森キャラバン」を開始。現在、県内40市町村でのこども食堂開催を目指し、ボランティアスタッフや実行委員会のメンバーとともに走り続けている。

今回の講演では、こども食堂を始めることになった経緯や苦労、県内の孤食の実態などについてお話いただいた。時折ユーモアを交えながらのお話に、時間があっという間に過ぎていった。



水尻氏による記念講演

八戸小支部・町畑小 館 朋 美

【第1A分科会】「教育課程に関する課題」

提言題 学校課題解決に向けた教育課程の在り方
～異校種間の連携における教頭の役割～

協議題 「幼・保・小・高・特別支援学校との
連携における教頭の役割」

提言者 七戸町立七戸小学校 教頭 佐藤 聡 氏

異校種間連携の取組等を通して、互いに理解を深め、児童生徒の発達の段階に応じた一貫性や系統性のある指導を行うために、教頭としてどのように関わればよいかを、アンケート結果をもとに実践発表がされた。

《アンケート結果と考察》

A：幼児・児童・生徒間での交流活動

「幼児を招待しての交流活動」「養護学校との交流活動」「生徒との交流活動」の実践例が発表された。多様性や互いを思いやる気持ちの醸成、小1・中1ギャップの予防などの成果は多いが、日程の確保や担当者の綿密な打ち合わせ等の負担については課題が見られた。

B：出前授業・授業体験

中学校の教員が小学校に出向いて出前授業を実施した例が発表された。中学校に児童が出向いて授業参観をする事例や小中JSなどの機会に技能教科の授業補助などの事例は見たことがあるが、小学校の教室で4教科の授業を実施していたことに驚いた。

C：園児・児童・生徒の情報交換会

進学前の情報交換は、各校欠かせないものになっていることは明らかなが、派遣する教員の確保は職員数の減少から難しく、また関係する保育園・幼稚園が多岐に渡る場合は更に苦しい状況と言える。

D：その他

JS事業を活用した授業参観では、活発な意見交換のために校種間で共通して取り組む内容や協議会でのファシリテーターの必要性が明らかになった。

《成果と課題》

グループ討議や三沢市立木崎野小学校菊池健一校長の助言でも触れられたように、「交流ありき」ではなく、ねらいや育てたい資質能力は何かを明確にすることが教頭の役割であり、その視点が教育活動の充実・改善や教員の資質向上にもつながることが確認できた。

弘前中支部・津軽中 外 崎 法 夫

【第1B分科会】「教育課程に関する課題」

提言題「学校課題解決に向けた教育課程の在り方～地域とともにある学校づくりの促進に向けた教頭の役割～」をもとに、十和田市の小中学校の取組が発表された。

成果として、教頭が、学校と地域間の連絡・調整を行う役割を担っていること、地域と相談・連携しやすい関係を築くことにより、地域とともにある学校づくりが推進されている事例があげられた。課題としては、現状として、学校支援の活動が多く、学校と地域が双方向の関係で連携・協働していく活動を増やし、体制を構築していく必要があること、また、地域でどのような子供を育てていくのかという目標・ビジョンを各種会議で共有していく必要があることがあげられた。

【グループ協議】

①学校運営協議会制度の状況について

多くの学校で学校評議員がそのまま移行されて運用されているところが多く、提言であったように学校支援に対する活動が主なものであった。

②地域学校協働活動の内容や担当者について

地域コーディネーターとして教頭または元PTA役員が担当している学校が多く、外部人材の活用例としては校外でのグループ学習の帯同や、調理実習の補助などの報告があった。

③学校と地域がともに目指す子供像を共有するための取組について

学校運営協議会を年間2～3回ほど実施し、その都度、成果と課題を報告しながら確認しているという意見が最も多かった。

④教頭が地域との連携づくりのために果たしている役割について

日程の調整や場の確保、各関係者との調整を図りながら、学校と地域を良い方向へもって行くことが教頭の役割という意見が出された。

【助言 檜館満校長先生】

学校に求められる様々な課題や依頼に対して、「何をやっているかではなく、なぜやっているか」という目的意識をもつことの大切さを御教示いただいた。

分科会での協議は、各地区の先生方との情報を共有できたとともに、今後の業務遂行の原動力にもなった。

弘前地区小支部・船沢小 奈良 禎 尚

第2分科会「子供の発達に関する課題」

提言題「未来社会を切り拓く力の育成を図る教頭の関わり ～目指す資質・能力を明らかにした学校運営への関わりを通して～」について、弘前地区小学校教頭会による提言発表とグループ協議を行った。

提言では、成果として自校の実態を踏まえた目指す資質・能力について、弘前地区全体の傾向を調査して類型化したことで、「他者を受け入れ共感的に活動する力」「情報を適切に収集・活用し、判断・表現する力」というような傾向をつかむことができたこと、課題として調査結果を学校運営に反映させる上で、各校の運営方針や地域性等、広い視野での設定が必要となること、実践に当たり、調査内容や考察の内容を校長会とも共有していく必要があることなどが挙げられた。



グループ協議では、小中の校種や地域の違いがある中での情報交換により、「目指す資質・能力のとらえ方は地域による違いもあるので、9年間を見通した中学校区でとらえてはどうか。」「教頭としてどんな関わり方ができるのか、各校の学校評価を持ち寄って、取り組む課題を焦点化してはどうか。」「キーワードの中には、似通った言葉や包括している言葉もあるので、内容や言葉の吟味も必要になる。」「取り組み後、どのように評価するのも考えていく必要がある。」などが出され、各校の取組について今一度じっくり考える機会となった。

最後に、助言者の村上輝仁校長より、①資質・能力について弘前市全体の傾向をつかんだものが、弘前市の指導の方針や重点と合致するよう、指導主事とも連携して進めていけばよい。②資質・能力は学習指導要領の文言なので、深い学びにつなげるために各教科、領域など授業の中で育てる資質・能力がかぎになるため、教頭としては研修部に働き掛けていくことが必要である。③評価については、研修や各分掌でそれぞれに設定する資質・能力の達成状況が評価となる。2・3年次に向け、弘前市ならではのものを作るという取組にエールを送りたいという激励の言葉をいただいた。

八戸中支部・第二中 元 澤 朋 子

第3分科会「教育環境整備に関する課題」

提言題 教育の情報化推進に向けて教頭としてどのようにかかわればよいか

～ICT環境の整備と活用の在り方について～

提言

(1) 研究の成果

- A 「ICTの効果的な活用」について
- B 学校間の連携を図った指導・支援の取組
- C 校内体制や家庭・地域社会と連携した取組

上記3つの視点で三戸郡内の課題を把握した結果、以下のような実態が分かった。

- ① オンラインを活用した教育の推進や、Wi-Fi環境や利用ソフトの整備において、各校教頭が現状と課題を基に打開策を教育委員会等へ提案するなどし、調整力を発揮している。
- ② 児童生徒の能力育成はもちろん、教職員の負担軽減と意欲向上も考え活用の推進を図っている。

(2) 課題

授業における活用の推進、家庭での活用力の育成、町村による利用状況の差異、教職員のICT活用力の向上等、課題が多岐にわたっている。教頭の役割を確認し、教頭会ブロックや学区ごとの効果的な取組について共有をしていく必要がある。

研究協議で挙げられた主な課題及び効果的な取組

- ①持ち帰りの意義：何のために持ち帰るのかを児童生徒と共有することの必要性
- ②人材の育成：ICTリーダー・ICT支援員を中心とした教職員のスキルアップ、研修の位置付け
- ③小中の連携：ICTの活用状況についても交流できる場面づくり

助言の概要

「教育の情報化」については、これまでも、現在も、これからも次々と新たな取組や言葉が生まれる。その中であって管理職は、情報化の重要性や必要性を理解し、経営方針や教育計画、学校評価等に情報化を位置づけ、マネジメントする力が求められている。

分科会を通して、「①共通研究で扱う項目を精査する」「②教頭が何にどのように関わることを見通しをもつ」ことの必要性を確認することができた。

青森中支部・新城中 工藤 雅人

第4分科会 「組織・運営に関する課題」

提言者 むつ市立正津川小学校 皆川 洋介

本分科会では、提言題「地域の人・学校・関係機関との連携を充実させるための教頭の役割～コロナ禍後の新たな連携～」について下北管内小・中学校が5ブロックに分かれて研究してきた内容を発表した。概要として①地域の人との連携②地域の学校間での連携③地域の関係機関との連携について、コロナ禍後の新たな連携という視点で、教頭としての役割に焦点をあてた研究が紹介された。発表では連携を進める教頭の役割に共通する土台として「対話」が鍵になっていることが示され、「ICTの充実」「現状を踏まえた改善・精選」「学校運営協議会の活用」を次年度の方向性としたことが示された。

グループ協議では、各校の取組について成果と課題が協議された。コロナ禍によって途絶えた関係を復活させるためにどの学校も苦慮していること、ICT活用によって新たな関係作りが生まれたこと、コロナ禍前の活動について検証する良い機会となっていること等が上げられた。

最後に、十和田市立東中学校中野寿彦校長先生から御助言をいただいた。まずは、下北管内の取組は、「子どもの育ち」について関係者が共有する点、「相互理解」を促進する点において素晴らしい研究となっているとお話があった。さらに学校と地域の連携については、教育に対する責任を分担する視点で行うべきであること、学校の組織運営では、複数体制または分掌を総動員することの有効性についてお話があった。「対話」の大切さについても改めて確認された。

組織を見直して、適切に管理・運営するのは管理職の役目であることも改めて実感することができた。



青森小支部・浪岡南小 八木橋 直哉

第5分科会 「教職員の専門性に関する課題」

提言者 青森市立橋本小学校 横山 由紀夫

本分科会では、提言題「教職員の学校運営参画意識を高めていくための教頭の役割」について、青森市内の小学校教頭へのアンケートをもとにした発表が行われ、その後グループ協議が行われた。

アンケート結果から、参画意識を高めるため、教頭がコミュニケーションを軸とした職員室経営に注力している一方、人員不足を起因とした仕事量のバランスの改善及び多忙感の軽減といった点では課題が見られるとのことであった。

グループ協議では、行事後に必ずアンケートを出させることで、教員の参画意識を高めることにつながっている中学校の例や、自己目標シートの活用（記述している項目の中で一番頑張りたいことを意識させることで参画意識を向上させる）、若手を主任にしてベテランを副主任にあてるといった分掌の工夫、対応に苦慮している教員への接し方など、多岐に渡って自校の現状と取組について話し合われた。

最後に、三沢市立堀口中の太田浩之校長から、自身の体験を踏まえた御助言をいただいた。参画意識を高めるには、当事者意識と仕事に対するやりがいをもたせることが大切であるということや、評価面談等において、ストレッチゾーンを刺激するような言葉がけで、どの辺りまでなら達成できそうかを確認し、成功体験を積み重ねていくことが参画意識の向上につながるといったことなど御教示いただき、教頭としての職務の重要性を改めて実感した。



知っておきたい 職場の法律

教育職員等による児童生徒性暴力等の防止等に関する法律等について

県教育庁教職員課

令和4年4月1日に教育職員等による児童生徒性暴力等の防止等に関する法律（以下「法」という。）が施行され、令和5年7月13日に刑法等の改正に伴い、改正されました。

本稿では、改正後の法や文部科学省による基本的な指針等の中から、特に学校での対応に関して取り上げます。

1 法の目的等

（1）目的

教育職員等による児童生徒性暴力等が児童生徒等の権利を著しく侵害し、児童生徒等に対し生涯にわたって回復し難い心理的外傷その他の心身に対する重大な影響を与えるものであることに鑑み、児童生徒等の尊厳を保持するため、教育職員等による児童生徒性暴力等の防止等に関する施策を推進し、もって児童生徒等の権利利益の擁護に資する。

（2）基本理念

各施策は、

- ・教育職員等による児童生徒性暴力等は全ての児童生徒等の心身の健全な発達に関係する重大な問題であるという基本的認識の下に行わなければならない。
- ・児童生徒等が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、学校の内外を問わず教育職員等による児童生徒性暴力等を根絶することを旨とする。
- ・被害を受けた児童生徒等を適切かつ迅速に保護することを旨とする。
- ・児童生徒性暴力等をした教育職員等に対する懲戒処分等について、適正かつ厳格な実施の徹底を図るための措置がとられることを旨とする。
- ・国、地方公共団体、学校、医療関係者その他の関係者の連携の下に行わなければならない。

2 児童生徒性暴力等の定義

- ① 児童生徒等に性交等を行うこと又は性交等をさせ

ること（刑法の不同意性交罪、児童福祉法の淫行罪、県青少年健全育成条例により禁止される性交等が含まれる。）

- ② 児童生徒等にわいせつな行為をすること又はわいせつな行為をさせること（刑法の不同意わいせつ罪、児童福祉法の淫行罪（①を除く）や、県青少年健全育成条例により禁止されるわいせつ行為等が含まれる。）

- ③ 16歳未満の者に対するわいせつ目的での面会要求、性的な姿態を撮影した映像の要求、児童ポルノ所持・提供等児童ポルノ法違反、児童生徒等に係る性的姿態等の撮影、映像記録の提供、保管、送信等

- ④ 次に掲げる行為であって児童生徒等を著しく羞恥させ、若しくは児童生徒等に不安を覚えさせるようなものを行うこと又はそのような行為をさせること
ア 衣服その他の身に付ける物の上から又は直接に人の性的な部位その他の身体の一部に触れること（痴漢行為が含まれる。）

イ 通常衣服で隠されている人の下着または身体を撮影し、又は撮影する目的で写真機その他の機器を差し向け、若しくは設置すること

- ⑤ 児童生徒等に対し、性的羞恥心を害する言動であって、児童生徒等の心身に有害な影響を与えるものを行うこと（悪質なセクシュアルハラスメントが含まれる。）

<留意点>

- 児童生徒性暴力等については、児童生徒等の同意や暴行・脅迫等の有無を問わない。また、刑事罰が科されなかった行為も児童生徒性暴力等に該当し得る。
- 例えば、教育活動における実技指導等において児童生徒等との必要な身体接触が生じることや特別支援学校の教諭等が指導や介助のために身体接触を行うことなど、教育職員等の業務上児童生徒等の身体に触れる必要がある場合も考えられるものの、これらの正当な業務上の行為については、必要な範囲・態様にとどまる限りにおいて、児童生徒性暴力等の対象とはならないと考えられる。

3 早期発見のための措置

児童生徒等や教育職員等に対する定期的なアンケート調査や教育相談の実施、電話相談窓口の周知等により、児童生徒等が被害を訴えやすい体制を整えるとともに、地域、家庭と連携して児童生徒等を見守ることが必要。

4 教育職員等による児童生徒性暴力等の事実があると思われるときの措置

（学校の設置者への通報・報告等）

当該学校に在籍する児童生徒等が教育職員等による児童生徒性暴力等を受けたと学校が把握した場合には、直ちに、学校の設置者に対してその事実を通報しなければならないとされており、当該教育職員等による児童生徒性暴力等の事実の有無の確認を行うための措置の結果を待つまでもなく、学校管理職は、直ちに学校の設置者に対して通報することが求められる。また、犯罪の疑いがあると思われるときは、教育委員会と相談の上、所轄警察署に通報しなければならない。

（児童生徒等と教育職員等の接触回避等）

学校は、学校の設置者への報告をするまでの間、教育職員等による児童生徒性暴力を受けたと思われる児童生徒等と当該教育職員等との接触を避ける等当該児童生徒等の保護に必要な措置を講ずる。

5 教育職員等による児童生徒性暴力等の防止・対処等に関するチェックリスト

文部科学省では、教育職員等による児童生徒性暴力等の防止等に関する基本的な指針を踏まえ、以下のようなチェックリストを示しています。

ア 未然の防止関係

- ☐ 校内研修等の機会を通じて、教育職員等に対する啓発を計画的に実施しているか
- ☐ 児童生徒等自身が被害を予防できるよう、啓発・周知徹底しているか
- ☐ 児童生徒性暴力等の防止・対処に関し必要なルール（SNS等による私的なやりとりの制限等に関する規則・指針等）や取組を整理・周知しているか
- ☐ 他の児童生徒等や教育職員等の目が届きにくい環境となる場面を可能な限り減らすよう、執務環境の見直しや組織的な教育指導体制の構築等を行っているか

イ 早期発見関係

- ☐ 児童生徒等に対して、早期発見のためのアンケート調査等を定期的に実施しているか

ウ 対処関係（事案の発生前）

- ☐ 児童生徒性暴力等が疑われる事案が発生した際の対応方針について、あらかじめ整理しているか

エ 対処関係（事案の発生後）

- ☐ 児童生徒等と当該教育職員等との接触を避けるなど、必要な措置を講じているか
- ☐ 学校管理職は、事実確認の結果を待つことなく、学校設置者に通報しているか
- ☐ 専門家の協力を得て、児童生徒性暴力等の事実の有無を速やかに調査しているか
- ☐ 犯罪の疑いがあると思われるときは、速やかに所轄警察署に通報しているか
- ☐ 児童生徒性暴力等の事実が認められる場合、懲戒処分等、適正かつ厳正な措置を実施しているか
- ☐ 雇用関係が消滅した後に児童生徒性暴力等を受けたと思われる事案が発覚した場合でも、犯罪の疑いがあると思われるときは、速やかに警察に通報しているか

児童生徒性暴力等については、まずは、そのような事件が起きないように、防止に取り組んでいただくことが肝要です。日頃から教職員と十分なコミュニケーションを図り、小さな変化を察知していくことも、防止の取組の一つです。子どもたちが安全に学校生活を送ることができるよう、引き続き取り組む参考としていただきたいと思います。

編集後記

11月9日（木）・10日（金）に郡山市で開催された東北大会（福島大会）に参加してきました。4年ぶりの参集開催となりましたが、1日目の分科会では、各地区の参加者と話し合う中で、皆さんが同じような悩みを抱えていることを知り、何だか心強く感じました。（東北大会の概要等は、次号でお伝えします。）

本号では、三八教育事務所長小関様、県教育庁教職員課の担当者様をはじめ、多くの方々から御寄稿いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。また、全国大会及び県大会の報告を担当いただいた先生方には、締切まで時間のない中にもかかわらず御協力いただき、ありがとうございました。

例年より早くインフルエンザが流行しているようです。会員の皆様におかれましては、くれぐれも健康に留意され、御活躍くださることを願っております。